

岩手の友人からの便り

— 岩手県 K 村立部落の

農民と政治

「前略 台風がまた暴威を示しましたね。操作に与える影響が心配です。」

『農村は變つていく。リバート二つ、よんでみてください。

○その上、自民党・元官房長官の後援会が結成されたのに柳瀬（ショック）という方がより適切一をうけて、選挙区を同じくする同党の（安保特別委・委員長）が国会報告会（？）をして歩いているが、二十七日には山奥のこゝ村落にもやつてきた。それをき

きにきた青年たちは、やつぱり○さんは話がうまい、といふんです。しかし、話がうまい、という表現が、従来の感銘（？）を伴つた評價としてではなく、偽踏を覆い隠そうとするのがうまい、という意味で使用されているのを知つて試しに、そこには巧言令色の本懶語としてではなく、偽踏を覆い隠そうと

○その2 二十八・二十九日盛岡で『母と女教師の集い、岩手県集会』がもたれました。ここ盛岡からは68名のおかあさんたちが、午前四時発のバスで盛岡へ行きました。うん

とすばらしいことだと思います。農村の中で、の物見遊山の氣分はあるにせよ、尊いことだと思える。

勞働力にすぎなかつたかつての女性の姿が消え去つてゐるのです。しかし、『母と女教師の集い』に絶対がないわけではありません。そこでは父親の姿がかけになつてしまつてゐるわけです。

ことの教育は母親まかせという父親の多い現況、この中にいびつなものを感じます。残されていく父親、それはかつてすべてを自らの考えのみで引きまわしをした人間の裏返しなのではないかといった感じですね。あえて『みぞ』といいますが、母親と父親、母親と父親集團のみぞはうめられなければいけないんです。

五・一九以来の農民への評価は、必要以上の静かな水に例えられるように、比較的中等級なのが常である。その平均さは五・一九以降少しもゆらがなかつたのだろうか。

Y君の住むM部落の青年たちが、『偽踏を覆い隠そうとする姿を見抜いたことは、彼等農村青年のその具体的な生活行動が、農場やムラに伝統的に用意されている祭礼、村出事への奉仕、村芝居（M部落は村芝居が盛んである）への取り組みでしかなかつたことを思ふと、たしかに尊いのである。より民主主義の意識への萌芽として評価したいのである。

彼等農村青年は、都會の青年のように豪傑の中でも意識変革を進めることがないのである。この通りはなにも具体的なことはおしえて、農村全體がそうであるよう、彼等の意識変革は、のろのろと煙のあがる、ようなものであるまい。その煙が不合理なものに対しても、あるまい。その煙が不合理なものに対しても、非難をこめた意味で『話がうまい』という一つのよろこびとして感じられる。68名のお母さんに変つたことは、それはそれだけで評議してよいと思う。彼等が民主主義・議会主義の不思議（？）を、いまこそ理解しはじめた

のではないか。五・一九以降すでに三ヶ月を経過いたしま。

議題に意識薄弱をいつきよに要求しても、なかなかそれは農民のおかれている地域性を基盤にしたものには適合しえないものであろう。「手桶の水」がいま少しつつ温まりかけている。その水は、いつ涼りつかないとも限らない。「手桶の大」をこぼさぬようにより動かし、置めていかねばならない。外からのエネルギーが必要であるならば、それを与えねばならない。すでに福武会員が提案しているように、こうした小さな事例でもよい、できたゞけ多くの事例を村研大会にもちよつて「接続社会の創造のための方法」を発明した。多少でもあり動いた「手桶の水」を再び運らせないためにも……（今野敏彦記）